ザルツブルク音楽祭 ②

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

《カプレーティとモンテッキ》のカーテンコール。左からサーラ（テバルド）、ワルター・ツェー（合唱指揮）、アクメチーナ（ロメオ）、ドライジク（ジュリエッタ）、アルミリアート（指揮）、タリアヴィーニ（ロレンツォ）、ペルトゥージ（カペリオ）。オーケストラはモーツァルテウム管弦楽団、合唱はウィーン・フィルハーモニア合唱団
©Salzburger Festspiele / Marco Borrelli

ベッリーニ《カプレーティとモンテッキ》

8月21日に聴いたベッリーニ《カプレーティとモンテッキ》は演奏会形式上演の長所を生かした公演だった。マルコ・アルミリアートの指揮するザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団は、いつになく光り、歌劇場付きの楽団顔負けの細やかさで、舞台装置の代わりに情景を描き出していた。ソロも粒ぞろいで、ホルンやハープ、チェロや、クラリネットが際立ち、こういうオーケストレーションが舞台上から流れてくるのが醍醐味だ。

イタリア人が3人もいた歌手陣だが、全員譜面台を見て歌うのだけは残念だった。テバルド役のジョヴァンニ・サーラは美声の若手テノールで、高音で一度声が割れたり、歌い回しもまだ荒削りだったりだが、今後の成長が期待できる。カペッリオ役のミケーレ・ペルトゥージは声の艶がなく歳を取った印象、ロベルト・タリアヴィーニは合格点だ。

今宵の華、ロメオ役のアイグル・アクメチーナは、豊かな倍音に包まれた声が聴く者に喜びを与える。フォルテでも最高音でも金属的にならず、それでもオーケストラに消されない。低音から高音までうまく統一させた歌唱技術は一貫してハーモニックに響き、フェルゼンライトシューレのホール全体を心地よく満たす。1曲目のアリアから「ブラヴォー」が飛んだ。ジュリエッタ役のエルザ・ドライジクは期待したが、登場のアリアの「レチタティーヴォ・アッコンパニャート」を「歌いすぎる」わりに歌詞が胸に迫らない。下降のポルタメントを多用しすぎたが、そのぶんレガートはきれいで、終盤ようやく体温が伝わり、死にいく二重唱では涙を誘った。

ウィーン・フィルハーモニア合唱団の男声合唱は、「a」の母音は明るすぎるものの、イタリアの男性合唱団があまり使えない柔らかな響きで奥行きを出し、すべてがうまく機能した上演だった。

ヴェルディ《ファルスタッフ》

反対に、前日のヴェルディ《ファルスタッフ》の消化不良はいまでも続いている。インゴ・メッツマッハーは、細部まで美しくまとめたウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のアンサンブル力を聴かせるのだが、美しい旋律を歌わせることによってその緻密さを緩ませることもなく、ところどころに散りばめられた笑いの仕掛けも生きず、真面目すぎる。クリストフ・マルターラーの演出も、「オーソン・ウェルズが監督して主演の他脚色や衣裳も担当した映画の制作過程」を重ねたため、臨場感に欠ける。ジェラルド・フィンリーは題名役に程遠い人物像、フォード役のサイモン・キーンリーサイドはコミカルな演技はうまくこなし、アンサンブルでは健闘していたが、アリアでは声がかすれるほどがんばってもつまらない。アリーチェのエレナ・スティキナは上手に声を集めて小回りをきかせるが、イタリア的な張りがない。ジュリア・セメンツァートは可憐な容姿と美声でナンネッタに適役なのに、フェントン役のボグダン・ヴォルコフもすばらしい歌手なのに、メッツマッハーは彼らに甘く歌う機会を与えない。セメンツァートがカーテンコール中ずっと仏頂面だったのは不満の表明か。

《ファルスタッフ》から。左からウェルズを演じたマーク・ボドナー、ファルスタッフのフィンリー、ウエルズの第一アシスタント・ディレクターを演じたホアキン・アベラ
©Salzburger Festspiele / Ruth Walz